

## 2 平成31年度（令和元年度） 全国学力・学習状況調査

### 調査結果を踏まえた学力向上7つの提言

#### 「学びに向かう力」・非認知能力の育成

##### 提言1 各教科の勉強が好きである児童生徒を増やす

京都府は各教科の勉強が好きである児童生徒数が全国平均よりも少ない状態がここ数年続いています。また、学年が上がるにつれてその傾向が強まる傾向があります。「教科の勉強が好きである」と言える児童生徒を増やすには、「その教科の力がついた」と実感できること、教科の学習が日常生活で役立つと明確に分かることが必要です。その教科を学ぶ魅力とは何であるのかについて今一度考えてみる大切ではないでしょうか。そこに授業改善のヒントがあります。それはまた、教科の「見方・考え方」を働かせることにも結びつくはずで、その改善が子どもたちの「学びに向かう力」を育むこととなります。

##### 提言2 褒める、評価するなどの取組の振り返り

児童生徒質問紙での「自分にはよいところがあると思う」、学校質問紙での「児童生徒一人一人のよい点や可能性を見付け評価する取組」が、京都府ではともに全国平均より低い傾向があります。児童生徒のよいところを見つけるには、児童生徒をよく観察する必要があります。また、児童生徒に自己有用感を高める声かけができていないかについても振り返る必要があるのではないのでしょうか。

##### 提言3 非認知能力の育成

非認知能力の育成は認知能力の育成に結びつくという研究結果がありますが、非認知能力と認知能力は一体として育成されるべきものです。「非認知能力とは？」という定義は諸説あるのでその定義について議論することよりも、各学校で育成を目指す子ども像に則って、「こういう力を伸ばそう」と決めることが必要です。「学びに向かう力」も非認知能力の一つですが、それ以外でも育成すべき非認知能力は何であるのかについて、校内での共通認識が必要です。

## 言語活動の充実などの授業改善

### 提言4 言語活動をあらゆる教科で行う

授業に言語活動を取り入れていることと、教科の平均正答率とは相関関係がありません。また、学校全体で、あらゆる教科で、言語活動を取り入れることと、平均正答率との相関関係も見られません。思考力・判断力・表現力を育成するためには言語活動が不可欠です。グループで話し合う、考えたことを文章に書く、他人に説明する等、各教科でどういう工夫ができるかについて校内で交流することが大切です。

### 提言5 子どもたちと教員の「ことばの力」を注視する

文章を正しく読む力が現代の子どもたちには十分ではないという研究結果があります。うなずいていても、実は人の話の内容が理解できていないという子どもたちの中にはいます。そのことを念頭に置いて、「これくらいの文章は読めるだろう」「これくらいは理解できるだろう」ではなく、「本当に理解できているのだろうか」と考えて、子どもの理解を確認しながら授業を進めることが大切です。そういったことに留意しながら、授業に言語活動を取り入れるべく、教員自身が言語能力に関わる研修を行うことも大切です。

### 提言6 生徒指導の機能を強化した学級経営

生徒指導の機能(自己決定の場・自己の存在感・共感的な人間関係)を活かした学級経営が大切であることは言うまでもありません。教員の子どもたちへの適切な声かけによって、学級は落ち着きます。教員と子どもたちとの良好な人間関係が構築できているかどうかは、よりよい学習環境が作れるかどうかに関ってきます。

## 学校の組織力の充実

### 提言7 模擬授業や事例研究などの実践的な校内研修や校内授業研究の充実

模擬授業や事例研究などの実践的な校内研修を増やすこと。また、校内授業研究を含む校内研修の質・量の向上を目指し、校内の「授業力」を組織的に向上させることが必要です。事前研・事後研の内容を充実させ、これまで実施してきた事後研の方法の見直しも視野に入れて、「教員全員が学べる場」を作ることが必要ではないでしょうか。

「この授業では子どもにどのような力を付けさせるのか」を明確にして授業を構想し、それができているのかを、複数の目で検証する。その繰り返しが校内の授業力の向上に結びつきます。授業を見る目を養うことも重要であり、研究授業の前では「どういう視点で授業を見るのか」について確認することも必要です。

そうした取組について外部からの意見を求めることも大切なことです。